2、 亜急性住血病と亜急性住血病兼鈎虫症との蛋白分屑濃度比には差異は認められなかつた。その分屑像は albumin の減少、α_1 - glob. の著明な増加、α_2 - glob. の増加、β - glob. の不変、γ - glob. の増加、A/G 比の著明な減少が認められた。

3、 慢性住血病の分屑像は、albumin の著明な減少、α_1 - glob. 及び α_2 - glob. の著明な増加、β - glob. の軽度の増加、γ - glob. の著明な増加、A/G 比の著明な減少が認められ、肝硬変症と殆んど同様な分屑像を示した。

4、 住血病既往者の分屑像は、Albumin の軽度の減少、α_2 - glob. の軽度の増加、α_1 - glob. β- glob. の不変、γ - glob. の増加、A/G 比の減少が認められた。

5、 住血病患者及びその既往者は血清蛋白分屑像上、Albumin の減少、α_2 - glob., γ - glob. の増加、A/G 比の減少が認められたが、これは肝機能障害を裏付けるものである。

6、 γ - glob. の増加は肝の虫卵による器質的障害及び肝、脾の虫体、虫卵毒素による器質的、機能障害的によるもので、形質細胞の増加、免疫抗体の出現等一連となつて現われる生体の反応である。

各群に於ける血清蛋白分屑平均値の比較

病種別	亜急性住血病	亜急性住血病兼鈎虫症	慢性住血病	住血病既往者	正常人
例数	25	22	12	14	15
T.P.	7.6±0.1	7.7±0.2	7.7±0.7	7.4±0.2	7.3±0.9
al.	41.0±1.5	39.1±0.9	34.5±1.4	44.0±1.8	50.7±0.7
gl.					
α_1	6.6±0.6	7.1±0.5	6.8±1.2	4.8±0.7	4.6±0.5
α_2	11.0±0.8	10.9±0.6	12.6±1.3	10.3±1.1	8.7±0.9
β	14.3±1.1	15.5±0.6	15.6±2.2	14.7±1.8	14.1±1.4
γ	27.2±1.4	27.4±2 2	30.6±3.0	26.2±2.1	21.6±2.1
A/G	0.70±0.06	0.65±0.08	0.53±0.07	0.79±0.06	1.03±0.02

14. 山梨県有病地学童の年間に於ける日本住血吸虫卵保有状況について

大田秀浄、佐藤重房、秋山澄雄、中山　茂

日本住血吸虫（日虫と略す）の人体の感染率は逐年減少し、塗抹法にては日虫卵の検出に極めて困難となり、集卵法にて実施しても検出虫卵数は極めて少数となつた現状であるので、有病地学童の年間に於ける日虫卵の保有状況を詳細に知らんとして、山梨県有病地の、中巨摩郡某小学校学童3学年107名、6学年81名の集団検便を MIFC 変法による集卵法にて昭和31年2月より32年1月まで毎月1回実施し2・3の知見を得たので報告する。

実　験　成　績

年間の被検者188名中、日虫卵保有者を通算し、92名48.93%に及んだ。又、年間延339例に日虫卵保有者を認め、1表の如く、1〜5ケ発見される者が76.7%にみられ、多数の日虫卵を排出している者は数例に過ぎなかつた。

1 表　　年間延339例の日虫卵検出者の虫卵算定数

虫卵算定数(ケ) ＼ 検出者数及率	1 ～ 5	6 ～ 10	11 ～ 15	16 ～ 20	21 ～ 30	50 ～
検出者数(例)	260	50	14	9	2	0
検出率(%)	76.70	14.78	4.12	1.17	0.58	0

年間10回以上検査者について各月の日虫卵保有者の状態は2表の如く、最高は5月の157名中38名24.2%にて、日虫感染時期に於ける著明な再感染の山はみられなかつた。

2 表　　年間の月別日虫卵保有者

月別	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1
被検者	148	151	161	157	158	161	116	160	163	154	161	161
日虫卵保有者	32	24	35	38	26	14	11	18	16	9	14	16
保有率	21.62	15.89	21.73	24.20	16.45	8.69	9.48	11.25	9.81	5.84	8.69	9.93

年間10回以上検査者165名中、年間77名の日虫卵保有者をみたが、年間に於ける日虫卵検出回数は3表の如く、1回のみ虫卵を発見された者は1名に過ぎなかつた。又、毎月継続して日虫卵の発見は4表の如く、1回継続して検出する者が、半数以上であり41名53.25%、継続して毎月日虫卵を発見する者は11回検出者の1名に過ぎなかつた。

3 表　　年間の日虫卵検出回数

検出回数 ＼ 数及率	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
検出者数	31	9	4	12	4	6	3	6	1	0	1	0
検出率	40.26	11.69	5.19	15.58	5.19	7.79	3.9	7.79	1	0	1.3	0

4 表　　年間の日虫卵継続検出回数

検出回数 ＼ 数及率	1	2	3	4	5	6	11
検出者数	41	11	6	11	5	2	1
検出率	53.25	14.29	7.79	14.29	6.49	2.6	1.3

然るに年間排卵者を累計し、77名に及ぶが、それを毎月累計すれば5表の如く、初回検査にて32名42.85%が検出され、5ケ月、毎月検査により68名81.82%に検出された。

5 表　　年間の日虫卵検出者累計

月別(回数) / 数及率	2 (1)	3 (2)	4 (3)	5 (4)	6 (5)	7 (6)	8 (7)	9 (8)	10 (9)	11 (10)	12 (11)	1 (12)	累計
検出者数	32	10	13	3	5	0	2	5	1	1	1	4	77
検出率	42.85	54.54	71.43	75.32	81.82	81.82	84.42	90.91	92.21	93.51	94.81	100.0	100.0

肝臓肥大の状態は6表の如く、188名の被検者中48名 25.53%に及び、殆んどが稍硬く肝臓を触知した。

6 表　　被検者188名の肝臓肥大の状態

学年別	被検者	肝臓触知			
		軟	稍硬	硬	計
3	107	0	25	5	30 (28.37)
6	81	1	16	1	18 (22.22)
計	188	1	41	6	48 (25.53)

註：　( )内 %

総括及び考按

1) 山梨県に於ける日虫病も殺貝、治療により年々減少しているが、最近集卵法により検便を実施し、意外に日虫卵保有者が多いのに驚く、しかし一面急性症は殆んどなく、且つ慢性の場合にも自覚症状は大多数が欠如している。これは日虫の人体への寄生数が著明に減少していることが判る。然るに本実験により年間延339例の日虫卵排卵者中 1～5 ケと云ふ少数排卵者が260例76.7%に及んでいることは、これを裏付けるものと考えられる。

2) 有病地の学童は農事の手伝いをなし、又、幾多の感染機会に恵まれているが、特に感染の好機は4月より10月までと考られるのに、本実験に於ては5月に24.2%を示すのみで感染時期に於ける感染率の山をみないことは当地域に感染貝の減少している事を裏付けるものである。

3) 年間12回検査中10回以上検査者165名中77名 46.66%に日虫卵を検出したが、年間1回のみ検出された者は77名中31名 40.26%にて、又、連続して検出される事は極めて少く、11回検出者を1名にみられたことは検出虫卵数と共に集卵法にても連続して虫卵を検出することは極めて困難であると考える。又日虫の生態からみて連続して排卵することは勿論、日虫の排卵周期と云ふ事も考える必要があると思考する。

4) 然るに本対象校に於ては毎月1回、5ケ月検査することにより日虫卵は 81.82%の検出率であつた。故に毎月本集卵法の検査にて少くとも 4～5 回は検査する必要があると考える。

5) 肝臓肥大の状態は、12回検査終了后触診したが被検者188名中48名 25.53%あり。これらは無自覚症の者多く、検便を放置し、本症の治療を放置する時は長年月の間に肝硬変、或は他の疾患を併発する可能性があることを想像せしめる。殊に3学年は6学年より多く触知し、有意差を認めた。

（本論文の要旨は第27回日本寄生虫学会総会に発表予定。）